

東大“秋入学”移行が 世界で始まる頭脳争奪戦

国際競争の出遅れに焦りを感じた東大が秋入学を検討。就職活動など現状の改革には困難も予想されるが。

大学研究家：山内太地

ライター/アフロ



東大もグローバルスタンダードを目指し始めたのか（写真は米ハーバードビジネススクールの卒業式）

「東大、秋入学に移行検討」
7月1日、全国紙の一面に、衝撃的な見出しが踊った。現在、日本の一部の大学では、春のほか秋にも入学できる。これを東京大学では主に秋入学へ移行するという内容だ。入試日程は現行のまま維持するため、合格者には高校卒業から入学までの半年間は「ギャップイヤー」として、海外留学やボランティア活動をさせることを検討している。

東大が秋入学を検討する理由はひとえに、グローバルスタンダードへの対応だ。濱田純一総長が発表した『行動シナリオ FOREST 2015』では、世界の潮流に乗り遅れつつある東大の焦りが感じられる。

たとえば東大の外国人教員比率は6%。米マサチューセッツ工科大学の14%、英オックスフォード大学の20%に対し、大きく見劣りする。同じく東大の外国人留学生比率は7.6%だが、学部生では1.7%にすぎず、10〜20%台という世界の一流校に比べても低い（左表・図）。

これが海外留学を経験した学部生となると4%程度。学内アンケートでは、7割以上の東大生が「外国語でコミュニケーションする能力が身に付いていない」と、回答した。欧米の秋入学とずれた日本の春入学が、東大生の「ガラパゴス化」を引き起こ

し、研究・教育に支障を来している現象は否定できない。いまや春入学が、大学生の留学離れ、大学の国際化の遅れを招いているのだ。

世界の潮流に遅れた東大就職活動はどうする？

日本人女性で初の米ハーバードBA（経営学博士号）を取得した、慶応義塾大学大学院メディアデザイン研究科の石倉洋子教授は、秋入学を前向きに評価する。「これまで世界の潮流から隔絶されてきた、新卒の一斉採用や硬直化した労働市場が流動化する可能性があり、好ましい。海外から留学生を集める、日本からの留学生を増やす点でも不可欠。新学年が秋から始まる国が多いので、研究者も留学生も、春入学の日本を

選ぶインセンティブは少ない」。

だが気になるのは、秋入学による就職活動への影響だ。企業や官庁が東大生のためだけに採用活動を年2回やるかは未知数。人材コンサルタントの常見陽平氏は指摘する。「大学にいつ入学し、いつ卒業するかは、流動的になりつつある。企業によつては、秋入学や6月卒業の大卒採用にも対応し、それほど混乱はない。企業に入社する時期も春とは限らず、必ずしも全大学が秋入学にならなくていいのではないか」。

すでに新入社員3分の1が留学生のロンドン。中村剛・人材開発部長は、「より多くの大学に秋入学が広がれば、企業も秋入学が一般化しよう。一部の大学が導入している現段階では、翌春まで入社を待っても

らうかもしれない」と予想する。東大生など一部だけが5年間の学生生活になるといわけだ。

「企業の多くは2〜3月が決算期なので、新入社員の採用もそれに合わせている。現在の春入社は、その組み合わせを、通年採用と同じ扱いにすることも考えられ、新入社員にとつても不都合が多い。企業としては様子見の段階だが、学生がギャツパイヤーなどでじっくりと物事を考える時間ができて成長につながるのなら、歓迎すべきだ」（中村部長）

研究分野における変化を期待する向きもある。米マサチューセッツ工科大学教育イノベーション・テクノロジー局シニア・ストラテジストの飯吉透氏はこう分析する。

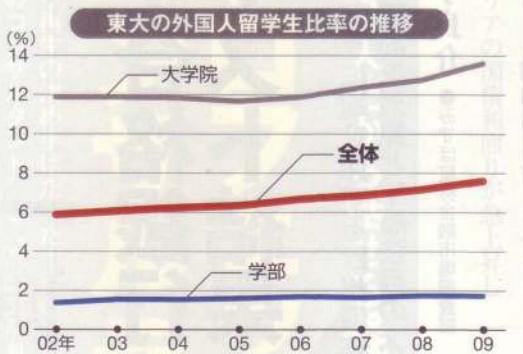
「たとえ東大でも、現状では一部

迎するとしながらも、「入学時期を世界標準に合わせれば、学生や研究者が集まるわけではない。全学を挙げ、本質的な教育・研究環境のレベルを世界級にする努力を、怠ってはならない」と、くぎを刺す。

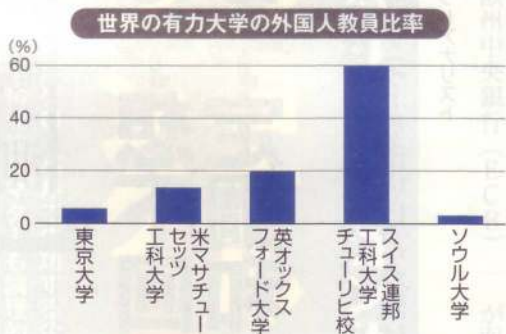
政策研究大学院大学の安田洋祐助教授も注文をつける。「国際化を成功させるには、教職員の意識レベルの変化、英語プログラムの充実、教育・研究成果の海外発信を、積極的に行うことが重要。近年では中国・香港・シンガポール・韓国が、給料や研究費を米国かそれ以上に引き上げ、優秀な研究者の引き抜きに躍りになっている。日本の大学も変わらなければ国際競争で不利だ」。

海外留学事情に詳しいアゴス・ジヤパンの横山匡・代表取締役は説く。「秋入学は大学や企業、受験生が大学のあり方について真剣に考えるきっかけになる。そもそも、3年生の後半にみんなで就活しようという、横並びの強制はおかしい。大学2年で内定を取って留学する学生が出てほしい。欧米では授業のない夏休みに世界から学生を集め、サマースクールを行っており、東大でも検討してほしい」。

日本の企業や大学も自分で考え、行動すべき時期に来ている。入学や就職の時期の多様化は、日本人の自立を促すのかもしれない。



(注)外国人留学生比率=外国人留学生数/学生数
(出所)「東京大学の概要(資料編)」



(出所)「世界の有力大学の国際化の動向」
(東京大学国際連携本部調査報告2007年11月)

東大は外国人留学生も外国人教員も少ない

東大の外国人留学生の比率は7.6%にすぎない(上図)。米スタンフォード大学や英ケンブリッジ大学は20%台だ。東大の外国人教員比率も6%と、やはり欧米に水をあけられている(下図)。

の世界トップレベルの研究を行って、いる分野を除き、欧米などの優れた大学に負けている。研究環境が整っていない、日本の大学に研究者や教員として就職するのが難しいといった理由が、日本の大学を選ぶケースを少なくしている。秋入学を欲